

来たそうに火燈の上や下り幽味
掃焚や膝に重たき眠る猫
水溜れて底打つ川の小松哉
誘はせと友のふへるや雪丸げ
親の脊を打つ身もぬくし掃の傍
客一人座敷も狭し餅越
持て来た火の禮厚し火燈客
餅揚や顔に似合ぬ唄上手
火燈から火種貫ふや今朝の掃
阿る親昔し忘れて雪丸げ
雪の夜となるや雨戸のさえる音
こがらしや立枯やふに笛の音
しぐる、や家風の潮の薄月よ
行そきてもの云替はそ寒さか
足もどに啼よる闇の千鳥かな
十尾稲出て戻りけり冬の月
家ひとつ煙りてあるや冬乃山
寒菊の咲あましたる日敷か
かいつより浮き出るまで見て過
水どりを吹あつめたり山おろし
繩ふしにあらればさまる垣越哉
犬をうつ石の夜なし雪の門
たもひ出して言事なかれ年忘
うつくしき日和になりぬ雪の上
谷越に聲かけ合や年木梢
しぐる、やけふはよもや云ふた空
みねくの液るや雲のいくしきり
山をこそ人にわかれて枯のか
寒菊やいつを盛りか昔か
野はかれて茶の木は花の盛かな
後さそ水練走るや冬の月
いか様にしづかなはきよ神の留守
時雨る、や暫し治癒と假りの宿
掃き切らぬ内は冬さき除夜の鐘
世の事はこれに習へよ雪の竹
小春日や袖の居眠る垣の元
胸に手を置て聴く見よ雪の竹
雪佛消へて浮世を示しけり
除夜の鐘響きは春に残りけり
正直の首にはなし神の留守
世の角は丸く頭巾に納めけり
煤拂聲もよされて聞へけり

翠行の昔語りや雪の鐘
小春日や障子にうつる蠅の影
炭賣や寒さを斗る樹の音
筆取れば鳥の散らしぬ雪の梅
行儀よくあふれば寒き炬燵か
戸に響く風の鈴や啼千鳥
一日づ、水を離れて枯物
寒空や旭に向て居る小田の戸
鳴く千鳥風に瘦せたる樹の松
一日のゆだねを溜る落葉かな
足音に知るや師走の人心
水鳥や松遣り越して不意と深
送られし人に譲るや雪の杖
旭に向て鶴の居並ぶ冬田か
櫻見に出たり小春の一日日和
日毎逢ふ人にも年の名残か
冬の月氷りた様に光りけり
あつらゑた様な日和や啼り咲
漸らしき世界造るや今朝の雪
神世ゆく姿なりけり掃の主
啼く鶴の小春こぼして通りけ
真直に風吹き通る枯野かな
世事は昔垣の外なり寒の菊
大雪や今朝は静かき松の音
小春日や干て置たる下駄の泥
辛抱は金と成るの予網代守
丸裸ある迄木々は落葉哉
孫風邪を引くなど云ふて頭巾哉
常よりも日の暮安き師走哉
ゆつくりと話し、て居る火燈か
さらさらと光る夜汐や啼千鳥
一本の松の目に附く枯野か
口くせふなりて思はせ寒さかな
雪の夜やねさけもされてこま
霜かれて見るも寒けき冬の山
寒き夜や下駄の音道さへにけり
寒さをいとはつ庭の雪見哉
身のたけもちまるといふ寒さか
詩も歌も繪も及ばぬや雪景色
物にふれるほどはとどまらぬ
借金に必せせぬと年のくれ
わびらやも同じ景色や墨根の雪

うかぬさも忘れさしたり庭の梅
大きなを撰れば掃まる生海鼠か
捨られぬ道草のみや年の取
雪晴れや降らせた雲も白ふなり
時も亦小春の名あり掃り花
雪の中へ雪を翻そや雪の枝
冬枯の見えぬ庄司や冬牡丹
茶も酒も相手内儀や冬籠
道草は枯れて牛鳴く廣野かな
木枯しやむべ山風の嵐山
池と立つ白鷺薄し雪野原
雪てした樹を山見る寒さかな
花の旅した日に似たる小春かな
忘らぬ家は賑はし年の暮
驚も添葉しつらな雪の竹
未だ咲かぬ梅から散るや雪の花
繪巻の富士に懸るやいふり炭
春待つや世話しき用も樂の種
雪中に咲がちからぞ冬の梅
隠れ家は山懐や冬籠り
竹は寐て松も聲なし夜の雪
憚からぬ咄し苔や夷子講
炭どりやつかわれ易き女の子
水もなき鉢にちいまる生海鼠哉
浮て来るよふに思ふや雪の島
金屏の繪を友にして冬籠
雪達戸雪の布袋と並へけり
松竹も梅も賣れけり年の市
さ、啼にはよき失ふ小庭かな
關も奇く車かよふや年の取
さゆる鐘力を入れて撞たらし
大木戸は名のみ残りて冬の月
後ろ日に追る、旅の小春哉
未だ青き草の葉こしや初氷
適な國の日の出や雪の不盡
さし水の来る間風呂待つ寒さ哉
同じ日に咲せ小春の桃櫻
雪積で閑隠し鳥月の留主
旅立を延して今朝の雪見哉
春待や踏は香の立つ青盤
香の濃て夕月淡し室の梅
日の表風の裏手や冬牡丹

二の足を踏つ、種る時雨講
賑わしき煙の種の年木哉
茶の花や迷ひ出て来た山の煙
時雨る、や傘の雫に星の影
咲かけて今日も暮けり冬至梅
鶏啼て俄に澄や除夜の空
間暖めの火に寒菊の匂ひ哉
昇る日の誘ひ起そや雪の竹
不二は夜の明るも早し暖鳥
二人寐て肩口寒き蒲團哉
雪折や夜の静まりを破る竹
雪垣や折節人の門違ひ
右左り雪を翻そや出合傘
垢除けて能き年取らん除夜の墨
赤梅を眼とは出来たり雪菓
雀鳴や日の懐の暮惜しみ
春待や梅も苔の枝配り
花嫁も素顔見らる、師走哉
轉ふ氣て歩行は廣し雪の道
茶菓子にもなりそな盆の氷哉
一ツ家も何か厭はん春隣
客に出せ馳走始の火鉢哉
花嫁のかくし力や大根引
孫の年おしへつ我は年忘れ
掃焚て後ろの寒さ山家哉
奇麗好き程汚る、や煤はらひ
手に書た字も管め込みて年仕舞
小柳土に虎の子渡を師走か
春競べに替める軒端の氷柱哉
茶の花や都の鐘も屈く里
朝寐して辰を家なし門の雪
助太刀の出舞ぬる形りや煤拂
炭賣の火もなき家に歸りけり
日を撰む曆の上や走り炭
積る程雪は積ませて月日哉
見る人に見せて嬉しや冬牡丹
雪の山朝日に動く氣色哉
水枯れて高き土橋や冬の月
春待や雪の地元の嵐山
須廣明石見ぬ寐心や資舟
無賣の請合ふて行く命哉
初雪や波のと、かぬ岩の上

富士近ぶ見するも雪の力かな
寒月や海は蒼るに眠る山
裸麥畦く山里の小春かな
握る手に戀も籠るや雪籠
子を持は笑ふ隙ある師走哉
水仙や雪の情けは知らぬ花
足音に知るや師走の人心
浦風や散る葉とまごふ村千鳥
影日南わけし一木や冬至梅
降る雪も花の心地や年忘
飯際や潜りて通る雪の竹
妻子して雪はらいけり旅戻り
暇喰た融言れぬや親の前
雪の夜や此子を拾し親は何處
物姿る怨氣も見へる冬の囃
煤掃に與許さる、男かな
朝晴の日影美しくし雪の上
霜に伏せまても山田の晚稻かな
身の樂や巨燵で盡も結ぶ夢
物待の炭削る音や壁際り
枯菊や秋の色香の思はる、
味増汁も蒲團も薄し安泊り
里は未だ降ねと雪の高根かな
除夜の用尽きて眠りど成にけり
大年のそとろく廻と茶臼かな
風音の中に音ある木の葉哉
木枯しや川底走る雲の影
笠捨て走り出る子や初九雪
水際で風の離る、落葉哉
穂に風は殘して暮る尾花哉
行違ふ人に風あり年の暮
鉢植の木にも時どて落葉哉
寒き日や親に居替る網代守
南天の實計り赤し雪の朝
約東の雪の降る日や年忘れ
山一ツ越て暗さけり暖め鳥
雪深ふ積りて淡き闇哉
世を捨た人は無事なり煤はらひ
寒き夜や子に別てやる手の温み
煤はらや來てから煤の初たそき
開くほどの心を暗くや小夜千鳥
立おしむ冬鳥月に後れけり

聞してのふゑて換まる炬燵哉
のみ足らぬさけに知らる、寒さ哉
足らぬ乳に親も子も泣く夜寒哉
道問へば連になりけり雪の人
錦着た奢りのはてか冬木立
崎嶇洲の光は高し富士の雪
人情ヲ寫シテ
降雪に針かくしけり鬼いばら
村しくれ月も涙におほるあり
門さして無物語や冬乃月
からむ手の勢に伸ふやけさの雪
或ル苦節ノ志士ニ贈トテ
はね返そ力は見へて雪の竹
消へやそき命は斯ぞ雪佛
とさま洩る風に針あり冬籠
煤掃て寐た夜は夢もさかり鳥
寒梅や折には惜しき一二輪
日の入て彌雪となりけり
替る日に限りの付ぬ雪の綿
巳が罪積程深しよじの雪
雪の人見送る雪の戸口かな
木枯や馬より下りて渡る橋
惜まる、日は暮易き小春哉
高浪を降り静めけり夜の雪
米よりも目に立つ庵の炭俵
雪の道敷へて杖を譲りけり
海中に此景色あり雪の鳥
暖めて親をねせたる霜夜哉
ふなかつたもさればと答ふ時雨哉
月と日と荷へと軽き曆賣り
嘘開きに猫ささかけの主哉
にさりたる心もさゆる新酒哉
旅の空時雨を軒の知るべ哉
夢うつ、さくやこたつに雨の音
飲み過ぎて頭にのぼる新酒哉
どりちがへばいの手にさるこたつ
見る内に大なな渡る時雨哉
犬乃行く跡を力や雪の道
花の時曠し座敷や冬籠り
挨拶乃とんとて指り寄る火鉢哉
此儘て正月したし雪の家
雪の戸を叩く哀や乳賣い

火鉢にも霜らぬ辛抱や弟嬢
負頼の差別も見へる雪の家
晴るかど見れば又来る時雨かな
世をかるくせぬ功見へし年暮
身又受て思へばつらし網代守
立寄りし松に思有る時雨哉
一ツ蚊の出で途に迷ふ小春哉
時雨る、と云ふより早し軒の水
冬の梅咲や来るらん曆賣
忠孝の人で有りけり雪の鏡
町廻れ駒手に散るや除夜の炬
花嫁も鏡見ぬ日や煤拂ひ
去年今年踏けて掃や除夜の鐘
花と降る雪恐ろしや越の雷
魁て師走を梅の笑ひけり
山寺や里より除夜の鏡餅
巧みたり鬼を欺く年籠り
四苦八苦一夜明れば御慶哉
詰つたといふは癖かり師走店
茶屋屋は紙の暖簾に紙衣哉
降る雪に肌だ寒むとや箱子窓
寒刺乃葉をとそや日のぬくみ
日は山に入けりしぎは立にけり
初雪は交の芽なけば埋めけり
降る音をさいて入れけり据炬燵
持てゐる内はつめたき据炬燵
降る雪と又かこつけて今日もまた
初雪やをしかけ客のくれる迄
大晦日いわく扇のかなめ哉
豊年の雪降らせけり銀世界
池邊は餅や身代つさあける
暗がりて大きくなた火鉢哉
暗く鳥の聲もどがるや冬木立
池田炭火に赤る迄の匂ひ哉
夜更して見たり吉野も冬木立
馬の背につかゆる軒の氷柱哉
おもふ事問ふ人もなし大三十日
そ、掃や風追出そ一さわき
踏ば鳴板橋長し冬の月
寐た人に物問ふて居る夜寒哉
後から膳をへて来る火鉢哉
降物の定らぬ夜や暗千鳥

雪の下駄ならして通入戸口哉
半の飯に年を讀まる、火鉢哉
山寺や幾つ着ても薄蒲團
海原のぬくむ音とる寒さ哉
旭や急くな松が枝に雪降り初むる
我儘の咲きふりもよし冬牡丹
行暮れて泊り屋もなし年の辰
降り初でこそ景色あれ雪の朝
古籟の夢や旅寐の薄ふとま
せかれ越と棹のものとさき年の浪
縮柱たつや鏡とさ針の先
一杯のさめる限りと雪見哉
三日月の端はと寒き氷柱哉
冬中に積りし雪や銀世界
雪晴て月もか、やく冬景色
燈火や消て明るし雪の中
つもる雪田の透る清き冬の空
面白やおもしろく降る冬のそら
見渡せばさとの廣かり冬の空
波音の治まりかねて冬の月
日のくれてはるかに見る雪の空
静かさや雪にからんで朝のかね
口紅の見へて愛らし綿帽子
口紅を袖にかくして綿帽子
挨拶も口こもりけり綿帽子
はさうある氷柱に太き朝日かな
数字梅が枝にひとしく咲くや六ツの花
年の瀬を流れ行く日の早さかな
淀川や雪の舟曳く雪の人
夜主の思に夜を守る聲か霜の犬
池の月動かで鳴の後戻り
滴の音南へ通る寒さ哉
雪晴やとびく、青き小松原
鳴啼や崩れて光る池の月
枯木にも満るや今朝の六ツの花
月の出て聲の近よる千鳥哉
聲無くは驚と知らまじ雪の空
北の瀬音の近よる夜寒哉
初雪と云ふ間に軒の早哉
豊作や何處も賑ふ年の市
後ろ手に持て給馬見る頭巾哉
浮て出たやうに見へけり雪の鳥

わ、なるも燃の果とや鉢叩
急ぐ灯に急ぐ燈の師走哉
雪丸や動かぬ折が出来上かり
日とへて神棚置くや煤拂
夜の積り朝のけしきや松の雪
水仙やさのふの雨の葉に氷る
雪隠り鼻から先よながれけり
少時總に實の入るや百夜も雪の道
出ぬ工夫斗りして居る火燵かな
限りなき日に限あり大三十日
入らぬ世話して嫌はる、頭巾哉
桐火鉢日よから庭も見ざりけり
最ふ寒るふくと更と火燵哉
大騒を提て争ふ斤目かな
行先で行先問ふや衣配
送られた人に譲るや雪の杖
待しし雪も降りけり冬籠
一ト年の端を踏まゑて岡見哉
雪の山麓の中に聳へけり
足る心より富はなし冬籠
行連ふ人あつかしき枯野哉
水鳥の啼や夜深き磯の家
戸口迄小鳥飛込む小春かあ
落葉をば花の詠りや立田川
返事待使重なる巨燈哉
言兼る嘶しに捲る火鉢哉
世の人等斯あた鴛鴦の番中
美しき旭の當りけり雪の山
塵一つ捨て目立つや雪の庭
寒月や廣野に瘦し松の影
可愛さの余りてた、く蒲團かあ
掃焚や明日の獵場の咄し合
押されても折せば起さん雪の竹
別た香も何處やら床し櫻炭
磯に出て鳥の友呼ぶ千鳥かな
た、む帆に日はつ、まれて啼千鳥
墨引て美し除夜の通帳
千鳥啼く夜やしみくくと須廣の宿
須廣の夜を明石へ運ぶ千鳥哉
来てはとは何處の時雨を山鳥
忠臣の鏡見付けぬ煤ばらひ
動忘れしちからおかし年忘

年の尾や板戸負行く畑道
掃の火を分けて飯焚く六部哉
神佛つとめては寄る火桶哉
櫻哉かへり花にも人のたつ
煤掃や箕にのけて置く納め札
煤掃や糞焚きとてし灰の上
初霜や糞焚きとてし灰の上
しれた日と指折かへそ師走哉
煤掃や島の中の一世帯
献上の鯛の動くや雪の朝
子は肌ふしつかり添て霜夜哉
板はしや時雨の渡る音もとる
一角は猫にもあてし火燵哉
寒せた子の笑顔伺ふ火燵哉
子の智慧のくらべ勝なり雪佛
白波をく、る船ある師走哉
橋なぐて渡る瀬もあり冬の川
新しき物を買はや年の市
和ら氣を持て降たり寒の雨
山茶花や猫の居眠る様先
船呼ば呼や川邊の友千鳥
禮云て又しへられる蕎麥湯哉
苦と思ふ人に樂あり年の暮
掃の火に嘶更けり女客
身に油斷それは迷ふや年の坂
炉の角に猫の居眠る寒さ哉
袴着や徳の備はる子の行儀
雪の日や彼も人の子梅ひるへ
耳を切る風や氷の刀哉
宵に来て積る思や松の雪
掃除して汚しける哉庭の雪
北風の笛吹て居る軒端哉
姫松や綿帽子着た宵の雪
見過去て懐寒し雪見つれ
氷りたる話しと解かそ炬燵哉
其肌にふれていちらし松の雪
冬の旅酒と寒さの根くらへ
初雪や捨て處さき椽の塵
寒くとも奇麗な雪の景色かな
其花も其香も白し冬の梅
ひとり前猫も場をとるこたつ脚

初雪や渡り兼たる橋のうへ
山見でもサテ何處見ても今朝の雪
からくと嘶の氷る夜寒かな
年忘れして寐る事を忘れけり
雪の夜や柱にた、く下駄の音
月雪のありても師走て、るかあ
暮る、とは知りつ、年と惜みけり
晴切らぬ内に出か、る雪見哉
一ト口にいへば短し年のくれ
初冬や田にあたらしき銀のあと
油断した敵の襲ふや大時日
一そしにやみの流る、雪野哉
貸買て親のさげんや年の市
戸口から海の見へ出と落葉哉
立咄しそる間に重し傘の雪
けふ濟てけふ嫁入も師走哉
今朝見れば啼た程居ぬ千鳥哉
底ぬけの桶をく、るや三十三才
御か、みの光りは同し神の留主
遠ちどり涙の間に、く聞へけり
眠ばかりを出して通るや雪の人
生かべに打込てあり年の豆
都合よふく、りぬけたり雪の竹
雪ふんた足を投出と掃火哉
木からしや提灯早き長堤
せり合ふて姉まけて立こたつ哉
大雪や返事の重さわたし守
金魚の底に見へそく氷り哉
ゆひ折て春を待子や事始
ふる雪もいとばぬふりや深寐鳥
世をゆつる子に打せけり年の豆
世を捨て紙衣に懸し焚埃り
吹上げた落葉に残る夕日哉
酔醒に朝込れたる巨燈哉
しとやかな寐起や雪の女侍
松風や月も交りて一ト時雨
火に酔ふて雪の朝戸を覗きけり
伸るかど見ゆるや葱の洗ひ立て
腹喰ふた腸洗ふ十夜哉
火事ありと引起さる、寒さ哉
ころんだを土産に戻る雪見哉
御茶を引く雪降る夜の長火鉢

火を燈とこるも稻架塔に小見渡
急かしう蕎麥切る音や蟹の客
一人り後家并借りて揚ぐ鏡み餅
井戸枯れて下女の苦情や貴ひ水
貸布圍損料の外に虱まで
鹿口を鶏が堀る雪ついで
頭巾脱き寺守呼んで古跡開く
指道標強らにありし雪野道
あたる火の炭圍て話し丸めけり
氷柱して鬚生ふ様や鬼瓦
散る時は雪さへ重し水の皺
廣前に居眠る鳩や神の留主
雪の日や用のない湯のたさる音
懐ろへ夕日を抱て眠る山
初雪や鶏さへ足を踏惜む
地祭りのしてある島や冬至梅
寒がりも我身忘れて雪丸け
桶や屋と栗に行く廣野
初雪を早苦にしたり販長者
茶の花に囀掛け置く里童
紅梅や窓にうつりし花明
酔さめの肌も寒し梅の花
枝の思たつてしれけり雪の鬚
聞なれし鳥は動かぬ拾鳴子
乳もらひの肌身にとふる霜夜韻
煤掃や手拭かけし梅の枝
煤掃や我子もおそる親の顔
冬籠りあた、かそうな顔の色
物たらぬやうにもあるや置火燵
餅つきの拍子止けり笑けり
ふとん着て眠る姿や雪の山
杉山に猿のさげびて冬の月
炭かまにかさして早し冬の梅
降る雪に面白たへやころぶ犬
風たへて竹に聲あり夜の雪
鳥一羽いつの間に来て枇杷の花
厚衣愛さる寒さも隔てけり
誘ふたるやうや小春の大根曳
笹の鳴る外に音なし夜の雪
喰ふ事も二人前なりさねの音
居ぬ等の庵に聲あり雪一ト日
炭賣りの翁白し今朝の雪

ひまをさる身で有るがら年の暮
餅揚や邪尸之手傳ふ人二人り
住む人の有るとも見へど冬至梅
あつらへた夜の明ふりや雪の窓
五膳湯車は乗り後れたり夕吹
釜より効多し窓の雪
結れる程月の離れる柳哉
起る程客の喜ぶ火鉢哉
物影の移るの斗り雪明り
渡し舟待間の遠し寒さ哉
柳かど傍に寄る影に枯にけり
しつかりと今日一日の小春哉
暮し手の鹿相残しぬ此寒さ
一寸出て長き睡しの時雨哉
行年や過ぎ普しの懐かしき
野も山も白しからりと冬の月
日のほかりばかりと開らく冬の梅
わんぱくの勝聲揚げし雪軍
時雨るゝや見てさへ淋し木の鳥
木柱の淋しや軒の釣干菜
煤掃や遠ふ人毎の笑ひ顔
袴着や五ツの道のふみ初め
よき事は先へ開かせる紙衣哉
浮れ出て野風の寒き小春哉
消安き物おは清じ霜の花
月白ふありて更たる寒さ哉
猿叫びお聲さへ度し冬の月
錦木お思ひ重ねて積る雪
親子して起し合けり雪の竹
物影もなふて失し冬の月
眞そぐに道の付けり雪の原
行通ふ戸口の水柱折られけり
水口は残して池に薄氷
氷るらん算は時々たける音
廣ろくどせぬは常なり冬座敷
賣賣を求めて買けり餅松
願んは買はれぬ数や年市
炭箱をかざしとなどや寒の梅
家主も知らぬすきわり此雪吹
鹿々でも客に馳走や置巨燵
日の中は汗の出るらし雪連片
我が物と思ふも邪尸なり下駄の雪

淋しや雨が敷き込む落葉音
上げて来て門を叩てけり笠の雪
我が山の現れて降る時雨かな
貸し借のなき身を安し年の暮
待ち勞れ見せて火を繼ぐ火鉢哉
客去た後坐に直る寒さかな
水鼻を孫が敷ふる寒さ哉
歩み行く前よりかゝる寒さ哉
イりば花見し山の落葉かな
どちからも奇麗に見ゆる雪の山
ひと世界別のやうなる巨燵哉
山鳩の羽叩くのふぞ冬の山
木がらしやされと梢は打れもせせ
存命で日和は合ぬ冬の燵
素平の世とはありけり煤掃
茶の花や咲も凋みも幾日立
寒念佛是れも浮世の動かな
大雪に杖かしにけり松の枝
葉の落た木に吹風も神無月
松島小春日や涉りて見ゆき千賀の浦
此振りを昔置きたし松の雪
世のならひとは言ふのみ大三十日
吾が年を笑ふて見たり年の暮
初雪や竹に六尺木に二寸
麥時や無事あわらへの歳問はる
座蒲團お居直り待や囀の聲
亞米利加と大和は葦の姿哉
輝や波ふむ夢のさめて又
芭蕉翁像前ニ願ツキヤ
心只是日は時初時雨
國の富よもや越ゆまじ年の市
水賣乃寒さを語る初水
泣癖の子も行儀振る妹叩
桶を子がさ、げよと淡山忌
一ツづ、春お移るや除夜の鐘
蕎麥賣の行燈くらし夜の雪
歌謡や殊に目出度き名なりけり
さう外と摩子の紙も師走哉
盗人も妹と凍る夜や鳴千鳥
別炭お咄の落を取られけり
煤掃て茶を焚炭や四疊半

冬季候の習見事なり京の市
子にはしきものゝ巨燵の右左り
雪時雨たのしかれとや草枕
日の恵み願ひ通りや歸り花
何となく深む小春や海の上
時雨會や月もいましてひとしくれ
垣の雪降り崩しては積りけり
雪國の雪をゆとりや松の色
雪の夜やたまさかして雪の音
炭籠で月を見え出る庵りかな
威氣こめて居る番厂や冬の月
茶の花も都に近きゆとりかか
辻君の獨りふり行く寒さかか
古墳や時雨に光る若は髪
子と思ふ親は抱き寒の寒さ哉
小春野や寝むはかりの未刻日和
降りたらぬ雨風となりけり
冬籠る教へ見せけり後脚
雪ちるや木曾の旅館のいく寒覚
更る夜の鐘や湯漿の撫でこゝろ
狐火は岬に消え小夜しくれ
山鳩の餌につく雪の戸口かか
朝市の午時を過ぎけり年の市
戦や血も吐そふか和摺われ
隅田の花垣は過くまじ册手哉
寒齋や垢の溜りし耳のたは
我が育てられし蒲團の厚さ哉
家鳩の啼きめくる雪の溢そ中
隠し喰ならぬ生海鼠の欠伸哉
言の葉も交る木の葉の時雨哉
置火燵愛兼旅山の初めかな
死集金預けて厄の柿味贈哉
多羅尼經三條り程の納豆汁
果もなくのつべり廣し冬の月
何の里もをなし姿は枯野哉
殊の外静な夜あり積る雪
笑虫も添た儘なる落葉哉
一ト年の油断よ世話し大三十日
旅人も落付良よ宿の雪
落葉して窓あさし込月夜哉
限りなく一ト夜お咲や六ツ花
氷る夜や磨たやうな月の良

初雪を花みして出る植木賣
炭碎く音に起るや村雀
水鳥の影も動かせ隅田川
イりば物音もなし冬の月
水仙の花に曇りは無りけり
水仙や寒の障らぬ花の意地
古井戸も埋もれて居る落葉哉
賤が家の煙りも太し雪の朝
荒浪に馴れて能く鏡ふ千鳥哉
雪積みや小窓明くれば鳥の来る
手短かに書た手紙や年の暮
海車煙り斗り小春野日陰哉
初雪や燈臺までは富士の裾
富士の雪神代の上は降にけり
應見へて帽は重し雪の暮
雪時雨くく富士の月夜哉
富士は不二木は木は冬の姿哉
寒菊に届き兼つる日脚哉
落葉して月影覗く庵の窓
掃除して鹿相を塵を雪の上
染たらぬ樹もある中を散る紅葉
春めさし日和積りや笹子啼
月の外ものなき池や番ひ鴛鴦
口切や梅提て來し僧ひとり
結ばれしまゝに枯たつ柳かな
凧や一聲走る三井の鐘
賑やかに降て暮けり里の雪
蹴洗ふたけ揺わける落葉哉
冬の月柴火の酔を醒しけり
雪まても降て賑わし年の暮
米搗の鶏買ひに行く雪日哉
梅もはや片笑盛るる冬至哉
大年や梅にはぬくさ日の當る
いろかしや毎日年の行く斗り
薪らしき咄も持ちて曆賣
死をさめたあこやの琴や初時雨
恨み兼に蒲團引かるゝ火鉢哉
急き來てそつと叩くや雪の木戸
鼠追ふ音の聞ゆる寒かな
はつきりと枯ても折れぬ柳哉
枯て遠宵時が原や夢の跡

みのなくも歌に實のわる際野かな
豆打や刺はこゝろの出し納め
竹火箸縮む夜伸る氷柱かな
徒らな予らし健氣な雪隠
禱着や益まで千代の石だ、み
月一ッ懐にして落葉川
登り松小春の夢を流しけり
仕事場に響のきく身や革羽織
濡れ衣とあるや時雨の持合傘
不足なき身よも師走の不足前
驚の來て静なり冬の梅
裾に引く雲を枕や眠る山
山二つ挿さ集めけり落葉かき
遠く鳴く千鳥に近き夜明かな
初霜や仕舞忘れし植木鉢
藁屋とは寒さの違ふ板屋かな
雪空と見れば涙み足そ茶水かな
捨るにも心違ひや餓の腹
遠く行く漕ぎ振りてなし雪見舟
ついでそこも心に遠し雪車の道
返り日のさそや紅葉の散る小口
時雨行く跡に見出しぬひるの月
霜やけやかわりし下駄の履こ、ろ
酒の氣はどらさぬ顔や朝代守
妻なしは余所の里なり巨燈
明の光に聲あり小夜時雨
古しんの細る寒さや置らんふ
羽ねた、く鶏から起て煤拂ひ
手扣の外に眼のつく年の市
鼻擦に早く見せたや梅の香と
鼻ひこのかいで見たがる梅の香を
鼻ひこに早く見せたや梅の香を
盲人も鼻にて愛する梅の香を
見の人あ巻め愛する、梅の香を
ひまな身に油断のならぬ鳴子曳
待てと來そひどりぬるの寒さかな
ぬそされたたもとで鳴りし鈴の玉
かくしても中からしらす鈴の玉
盗人もかくしよのなき鈴の玉
はつ霜や眼につき易さ庭の塵
しくる、や空は月のありながら
明て見る夜半のさむさやはつ氷

水相みさむさのみゆるこほりかな
はつ霜やみるたびつる身の酔ひ
先に立供も思ひ雪の中
水瓶の氷にわる、さむさかな
獨り来る孫に氣のつく寒かな
骨折を見て通られぬ落穂かな
ほどく、にのぼれば易き年の阪
一寸覗き扇で見るや梅の花
立どまり呼ぶかと聞けば蛙かき
鼻出した様に地蔵の氷柱かな
松竹の我慢を折し今朝の雪
肌寒さ風はすこつく糊糊神
掃箒せた様に軒端の霰哉
叩かれて目出度さ配る神樂かな
假誓の苦や氷柱の長短
火を附けて側で手を打左義長かき
開く時木の實結ぶや梅の花
寒中に汗を流して稽古角力
寒中にはだかや汗や風呂の中
乳母も呼ぶ一うそ出來た寒の餅
歳末に行かれぬ程の積り雪
様先で見るともさきの雪見哉
一年の積さしまいなり暮の餅
ねま衣がへ何をたより炬燵か
天地に炬燵入れたし此の寒さ
右左りどちらもよしや頬冠り
雪に雪ゆきに行かれぬ雪の中
冬かから雲に春あり花や散る
ふるふ程なほふりつくや袖の雪
年よれ色はかはらぬ冬の月
三日月のかくれて後や雪あかり
片袖に顔を隠そや雪しげさ
枯草も八重の根ささ度々の雪
ゆめさめて炬燵お聞くと明け鳥
今日もまた一輪咲きて室の梅
白雪のながめも清き日の出哉
月の出に光をかへそ氷かな
昨日ふりて今日雫たき松の雪
雪降りて静かに聞ゆる笹の音
霜がれしはせその根も残りけり
氷をば割りて清めん手水鉢
火も消へて淋しきことは京都類

身は居ても心揺らぬ師走かき
木曾山は雪も見へけり小春風
初月や月は真備雨のあし
猫一ッ留守の火燵を守りけり
稀に來る人なつかしや暮の雪
大木の空に降り止む時雨かな
海鳴て一夜たもたぬ小春かき
江に移る月に限さる霜夜かな
手を掛て嫁の笑顔や大根引
淋しさや馬のいな鳴枯野原
灯開や手元一つ夜の蠅
空晴て波音高し渡る鴈
兼て開は隣も遠き礎かな
飛まてふして時雨や軒の馬
初雪や遠い島から夜の明る
行燈の光りそるとき寒かな
寒菊の露となりけり湯の煙り
鴨鳴や焼明臺の灯の勢ひ
雪の日のあやなく暮る、廣野哉
茶の花や明ふて摘た畑ゆかし
枯柳池にとじつく氷かな
品評會にいのこの餅や四郎右衛門
風やこ、らで止まれ千里濱
さ、鳴や法り讀み習ふアノウエオ
焼草の跡や顔出そ露の塔
鉢叩きか、も子もなし世は自由
肩衣の世を脱かへて紙衣哉
五十九ノ年暮
寄る波の餓や六十路のたげねのし
初霜や驚驚染形の置蒲團
松が枝も尖く更る冬の月
旅をして袖も時雨る、夕へかな
宿引のよいとめしはや夕時雨
春咲かぬ梢にもみつ雪の花
招かれつ招きし果や枯尾花
旅籠銭さめて拂ふや笠の雪
常笠のたぎる一ト間や冬牡丹
髪も霜置添ふる夜に朝代守
風や戻つて酒の酔を知り
報謝出そ手も服ふ夜を寒念佛
終の花やそるさき葉にも似せ
かさくいる羽遣ひ世話し三十三鳥

松風のはげしき星や冬の月
香も阻めて腰につやかし枯尾花
たつた今星見て寐たに時雨哉
日や月の恵みは余所に室の梅
咲かけて幾日よなるや寒椿
降る物のすくなき年や冬の梅
遊ぶ子の愚より大かい雪丸け
しめる戸の外は春あり大三十日
せまくなる座敷もうれし餅苳
降る雪の中に豊かや餅の音
釜の湯もたさりて時雨開く夜哉
酔ふ程の人は來て居る歸り花
あどへ咲く苔とてなし歸り花
忘れたる寒さ登るとき十夜哉
苦は酒に預けて樂し年忘れ
夜に開いた音を今朝見る落葉哉
ふぐの友にげて寐やそき毎夜哉
事足れば足るでいそがし年の暮
雪の聲通はそ梅の操かな
よき夢のさめて醒けり敷巨燈
雪道に下駄は後にと残りけり
寒かると思へど開く雪の窓
大三十日町の娘が鬼の役
宵の内思は老積る朝の雪
大關も小股取られて下駄の雪
盗人の跡かくされぬ雪の道
暇乞して立兼る火燵かき
手にのせて見る間置やはつ氷
逃げ雀今朝は我れ見ぬ竹の雪
子祭や貯金仲間の呼れ合
辻堂の有て淋しき枯野かな
たのまれて出來ぬ仕業や雪隠摩
山茶花や訪來る蝶も曾てなし
荒浪や列の亂る、磯千鳥
春の様何處へ行しや枯柳
夕はぬて錦散り敷く紅葉かき
影法師のそひへて寒し冬の月
出はなれて一人淋し冬の月
つい消る景色は見へぬ雪の庭
月ならて日を見て消ゆる雪鬼

兼腹へ熱ひ物食ふ寒かな
初時雨一寸宿かる松の山
嗚呼是は何とも謂へぬ雪景色
冬の月野道の友はさき一ツ
惜む燈は消て主の起はじめ
満月のするどくそみしかれの哉
日の本の花の花とはさく櫻
行々は我子の爲や人の世話
捨られた身に巡り逢ふ蛤村し
炭はせて夫婦喧嘩もすみとなる
炮藥や豆でいる夜の御年越
猫か猫抱いて小判の稼かな
寺男極樂さうに勤めけり
三番更踏ではいるや雪の下歌
味附駿河富士の雪汁甲斐後をつ
貫ひ来て松竹梅と湯のあつさ
竹の雪人の心に懸りけり
月入て四面白雪の光りかな
かいわいて黒木は見へと雪の山
行合ふて片足よける雪の道
松の葉の色のまざりし今朝の雪
花の雪かつきてわらふかん椿
初まこははたゑにおひの雪見かき
手廻しをしてもいそがし大三十日
かへあなのさむさみにしむ雪の風
木かけよりほかへ口より花の白ら雪
兼心や嫁か持参の新蒲團
庭帆を外して煮の浮寐かな
今日こそと下女も手をうつ年忘
水底に影の深さや雪の山
膝崩す人も見受けぬ火桶かな
落葉して梢に残そ宵の月
明日またとわかる、友や親と汁
初霜や圃に人もる海の上
日に乾して兼心のよき蒲團かな
娘氣も離れた振りや煤拂
物問へは耳を教へる紙衣哉
巨燈から店の戸より尋ねけり
御寺出て懐さかそ頭山哉
赤足袋や歩行て来たを譽らる、
飯の友寄戸からそつと招きけり

怠らぬ身は越安し年の坂
豊さや師走の門に翻れ米
眼自慢に厩見て居る紙衣哉
冠らせて笑顔覗くや子の頭巾
出ぬ思案山を顔乗せる巨燈哉
初雪や田舎娘の薄化粧
御内かと問はれて隠し雪の朝
雪の朝妙を處に置き巨燈
庭の雪踏みおせろふて縁の端
轉がてゑ氣の毒がらぬ雪の中
涼車の徳東海道を雪見哉
此上は積みよふもなき卒の雪
驚はまた寒むがるに梅の花
遠ち近ちの山ははげありかみき月
月ばかり梢に残る冬の明
はうし着たそかたや雪の鬼かわら
ちよとよと去りきもの無き巨燈かき
柴うりにさく初雪のうわさかき
みそさ、ひ遣入るや屋根の鬼の口
池に落さりしと舞ふ木の葉哉
夕ぐれの枯野にそこし石不動
木からしや瀧懸は瀧を蹴て行
我宿と思はさりけり雪の景
留主の垣覗て見るや水せん花
ゆき積て世界のちりをかくしけり
柱より太き掃たく小家哉
大雪やひさこの米をたきつくし
居酒屋へ忘れて出たる寒さ哉
工みなき子のたくみなり雪たるま
戸はわけてあれと留主なり山の神
はなれ家も掃音つ、く年の餅
廣き野へ出る程せまし雪の道
落さうに見へて根つよき水柱かな
こわい物見たさ心やふくと汁
とちちから見てもいんよ雪の不二
義虫も日和親ふ小春かな
大の子の臥かねて泣く夜寒哉
日のあたる窓の障子や冬の蠅
大箱に表れさつくと野菜畑
給心もあるか火鉢の灰せ、り
親の眼をしはし忍びて雪轉
餘念なく膝に見の寐る掃火哉

雪覆て國の境はなかりけり
降からこの樹を惜しむ落葉哉
落葉播く乞食も年の用意かな
いるかしい中にゆたかや餅の音
夜もそから風の聲さく寒かな
水鳥のはらふ羽音や夜の雪
餅つきの音の並ふや在所町
知ぬはと結構はなし煎汁
遠慮するよめのやさしき巨燈哉
奇麗さに喰てもみたき今朝の雪
焚火して何を笑ふぞ冬籠り
うた、ねとふと起さる、寒哉
辛抱はこゝに有りけん雪の竹
子が親と叩くも孝の蒲團かな
どちちから笑ふぞ煤の良と貞
冬の詩く寒の種や玉簪
た、まきに雪の傘戻しけり
庭に月しづめて浮ふ池の鴛鴦
艇に聲こぼる、雨の千鳥哉
月影の氷る眞砂や鳴千鳥
浦なれて千鳥鳴なり月の須戸
格子窓細目に見るや冬の月
影踏ば霜に聲あり冬の月
日に影もちいんで寒さ釣乾菜
木口から嘸はつる、掃火哉
着重て足を忘る、寒さ哉
梅畑に杖曳延ばそ冬至哉
母親の賜の厚き蒲團かき
夜の更て炭も衣を重けり
た、まきに雪の傘戻しけり
べ主に操立て待夜の寒かな
立遣は居るども知らそ雪の驚
寄り合ふて冷たくしたり置こたつ
一日にせまつて出るや寒見舞
一輪に折る枝太し冬の梅
音のさき時か盛りや夜の雪
分別の相手にもなる火鉢哉
姉は早よその人也年忘れ
遅れて春待つ雪の山家哉
嵐の相手にならぬ柳かき
金の梅人の油断に咲にけり
留主番のふるいつくしぬ炭俵

寒る間に送る小春の日南かき
子と杖にして越安し年の坂
畑にも鳴く満汐の千鳥かき
炭つぎに出て盃をさ、れけり
馬阿りく時雨る、夜道哉
白粥の甘味覺ゆる霜夜かな
鰻喰ふて存分腹をさそりけり
鳴啼や追ひくつる雨の音
飛かして居直る雪の雀かな
訪ふ等の人に櫛さ足と炭火かな
見て居れば光の付くや山の雪
掃わけて神の膳置く落葉かき
野にも寐し放もして来て冬籠
戸開きや二人の親を客こゝる
神の木へ時雨に戻るからとかな
雪深し鴉の聲も聞かぬ暮
寒た鳥の照り透されて冬の月
寒梅や力一杯見せて咲く
網代守月にも晒そ白髪かな
大家から出たふりもせそ雪の人
雪の家無事一筋の煙りかき
時雨る、や焼蛤の晝飯籠
雪に手を突れ跡ある關家かな
訪はる、と見て待遠し雪の人
旅の夜と思へは軽き蒲團かな
涙を這ふ窓の煙や夕時雨
鰻提て覗はくらさ我家かな
窓一ツ月と時雨の庵かき
温石のさめて開けり啼千鳥
一人つ、出る顔寒し松上り
橋立や松に消込む朝千鳥
鰻の友心に毒は無りけり
月の瀬へ出て流る、小鴨哉
客一人り止めて煙るや雪の家
森の灯の見へては凄し冬木立
利けばよし利ねば榮餘葉喰
水鉢にしやこ入れた儘氷りけり
いでたちは總たそきなり煤拂ひ
もの學ぶ道も早めて師走かな
雪かたれ傘の軽さや寒の雨
早咲きや生たる花器もつ、ら形
なた使ふ斯も打割り大工かな

雪は日や耶と伊達乃長柄傘
 口舌種薛さかり雪は積る朝
 積る雪より起るあらし積
 昇限る旭乃和らかし雪は上
 作り手は覺へぬ雪はわく成
 無理ならぬわく成や雪は掛松
 墨染乃町とも見へぬ雪は朝
 既夜とはなれて花や松乃雪
 他力たけ大きふしたり雪佛
 句ふかと思ふや雪乃初はし
 和らかか雪は渡るや雪乃鐘
 人形家れ子か上手なり雪細工
 湖上た音和らかし雪の竹
 園ゆかし雪ふるよつけ止まつけ
 浴室へ荷ひ込けり雪乃竹
 思ふ夜の雪や咄し積るほど
 花も實もあむ静さや雪乃暮
 松風乃手あしむ朝や大根引
 冬牡丹主も崇められぬけり
 舞せたる舞もかな冬はたん
 大さうな葉ふり見て引く大根説
 一輪の幾客も来つ冬牡丹
 柳よし文つよし雪は向ふ島
 金屏の寫さこや此雪は松
 花鳥は世を待つ雪は山家の香
 松は夜物もゆきの且かか
 木屋町も居馴染のつく雪見説
 降り暮る雪も音は有る夜説
 須磨の客雪も藤を捲せけり
 友はしき日也雪見の一人酒
 雪は人酒屋尋ねて通りけり
 雪の山月乃出てから暮あけり
 下駄叩く音と雪らし夜の門

雪は茶事不参の使辭しかり
 行冬も翠り残してかれ柳
 只高ふ見る外となし雪は山
 酒賣も来るや鯨の見ゆる浦
 冬もよき樽や庭乃米俵
 姥捨乃昔語りて巨燈籠
 寐付かぬ温石さめる霜夜説
 炭句ふ窓やいかふも物靜
 初霜や昨日時たる姿は上
 年五十頭巾も似合初めより
 老たりと知るや霜夜の膝頭
 松も旭のか、やく霜乃夜明け
 麻とうむ業ひ消し雪乃家
 雪は朝旭と遅かれと思ひたり
 静さは重る音や夜乃雪
 驚黒し鴉と白し雪野原
 橋立の雨も仕たり雪は松
 氷る夜や老たりと知る膝頭
 磨かねと玉も瓦や寒稽古
 霞も木の實乃交る山家説
 酒機嫌くつより頭巾忘れけり
 初雪乃戸も来て居るや樽拾ひ
 寒垢離の顔へ惠みの旭説
 風呂吹や眠て忘る、冠り物
 冬籠り問ふや茶の友圍碁の友
 草臥し足くつろくや樽乃傍
 十月や賑ふ寺も寂る宮
 高臺や雪ふと、まる朝景色
 冬木立森鳥も見えて月高し
 初雪や若人の車老と杖
 恙なふ貢も濟んで年忘れ
 半日と機も休みて大根曳
 此日和翌日もありたし大根曳

俳句拾萬題

明治四十二年四月十七日印刷
 明治四十二年五月一日發行
 (發句拾萬題)

編輯者 村 瀨 元 代
 東京市本所區荒井町卅三番地

發行者 大 川 錠 吉
 東京市淺草區三好町七番地

印刷者 川 崎 清 三
 東京市淺草區南元町廿六番地

印刷所 大川屋印刷所
 同 所

發行所 聚榮堂大川屋書店
 東京市淺草區三好町七番地
 (電話下谷一五七三番)

不計
 複製
 東京市淺草區三好町七番地



由喜馬琴翁集編

○俳諧歲時記

全一冊 郵稅共三十二錢

無適庵編

○俳諧道しるべ

小判 全二冊 郵稅共二十二錢

○今人發句五千題

全一冊 郵稅共十二錢

津田南澗編

○俳諧發句全集

小判 全二冊 郵稅共二十二錢

京羅園梅耕編

○頭寄發句古人五百題

全一冊 郵稅共十三錢

●和歌八重垣

全一冊 郵稅共二十四錢

○俳諧發句自在

全一冊 郵稅共十八錢

○明治發句大家萬吟集

全一冊 郵稅共十四錢

○俳諧掌中の手提燈

全一冊 郵稅共十錢

○給入季寄手引草

和綴 全二冊 郵稅共四十錢

●芭蕉發句集

和綴 全二冊 郵稅共十六錢



谷口政德編纂

訂正 ○普通日本中歷史 全一冊
增補 ●四十五錢

機節天野製編纂

訂正 ○普通日本中地理 全一冊
增補 ●四十五錢

毛仙春耕野夫著

訂正 ○農談百夜草 全二冊
增補 ●六十錢

重慶大畑先生著

○陸海青年祝文演說一萬題 全一冊 ●三十五錢

同著

○記事青年作文一萬題 全一冊 ●三十錢

岡本半溪翁著

○草花盆栽培養法 全一冊 ●三十五錢

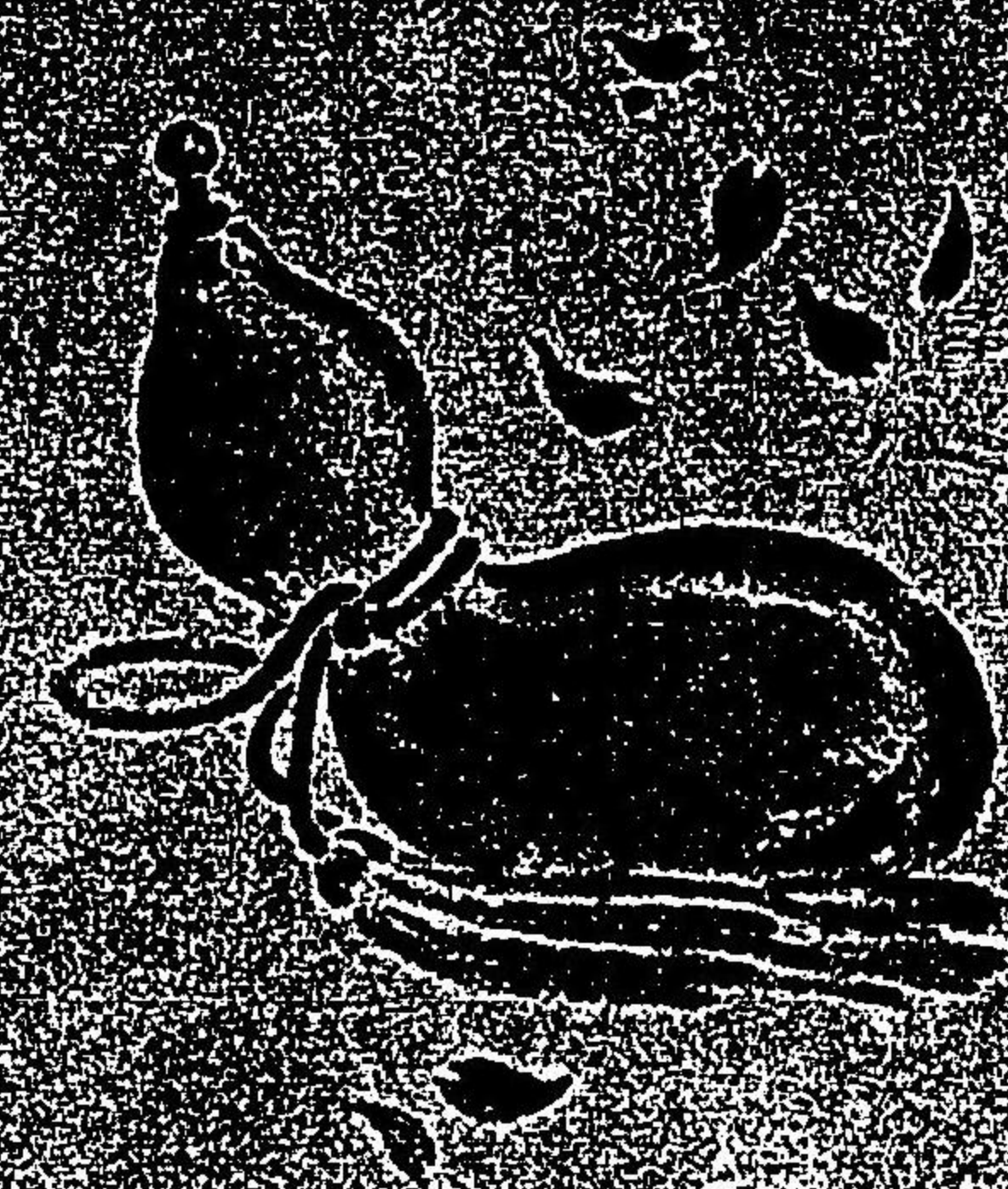
同著

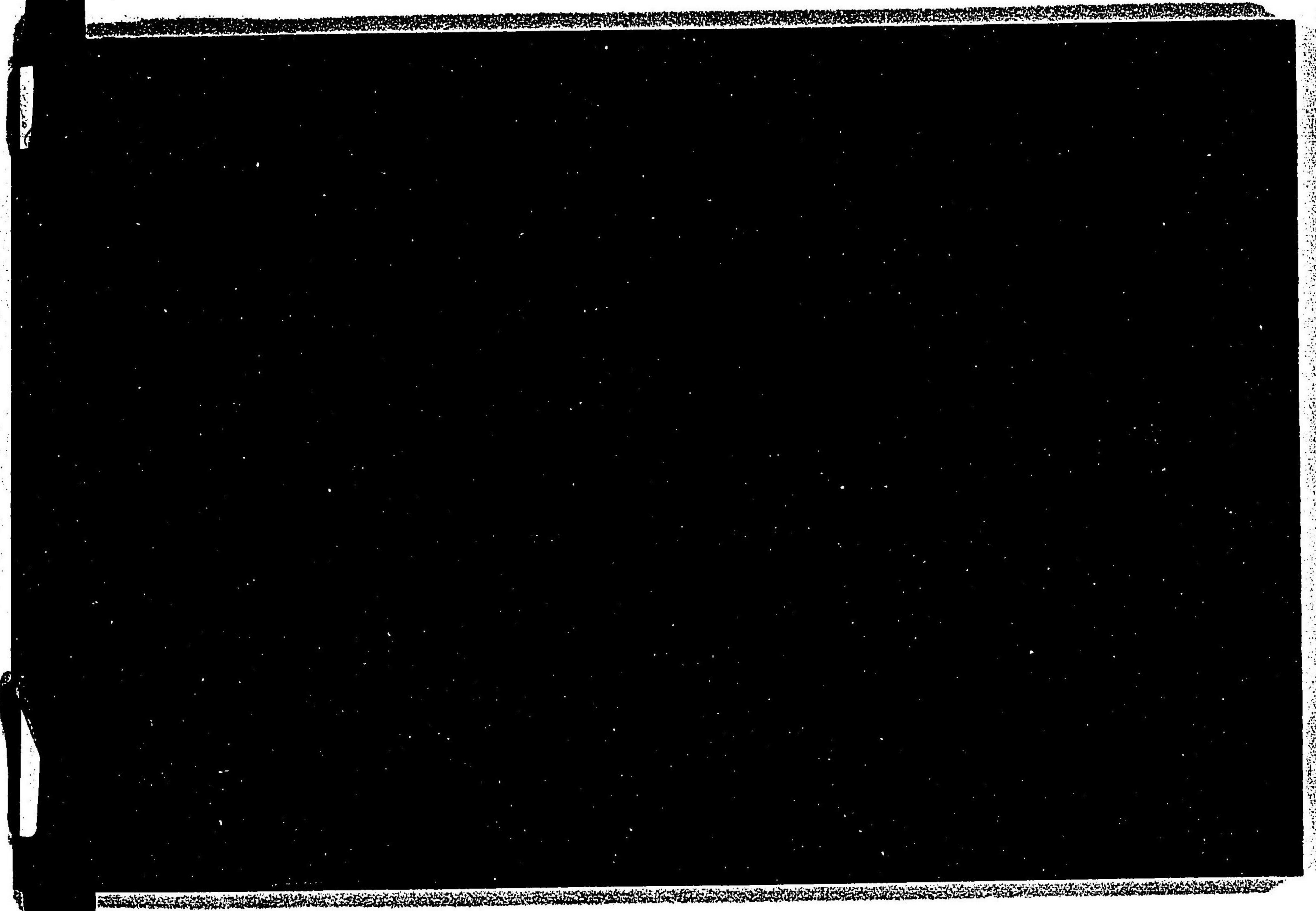
○草花栽培養錄 全一冊 ●三十五錢

木村文法翁著

○庭山庭作秘傳 全一冊 ●三十五錢

○庭山庭





特 22
842

題
下集十万句彙
俳諧

国立国会図書館

